

『絵には生命力があることを
信じずにはられません』

杉本 洋 (日本画家 横浜美術大学特任教授)
Sugimoto Hiroshi



作者が込めた想いは時代を超え、
作品を通じて後世の人たちに届けられる。

Profile

1951年東京都生まれ。東京藝術大学日本画科卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修了。1989年、出雲大社大阪分祠神殿襖絵制作。1993年、秋篠宮家扇面制作。1999年、京濱伏見稻荷神社参集殿壁画制作。2004年、文化庁文化交流使に指名される。これまでに開催した個展はカナダ・ヴィクトリア美術館を含め30回以上にのぼる。その他“青梅アート・ジャム”や“NHKハート展”、“東日本大震災義援展”など数多くの展覧会に出品し、精力的に制作活動を行っている。2017年4月、NHKのテレビ番組「視点・論点」に出演、「文化財の劣化と保存」について解説を行った。

※肩書、略歴は2017年4月現在のものです。

2016年11月、奈良県葛城市にある
當麻寺中之坊客殿に、天井画『紅葉』
を奉納した日本画家、杉本洋氏。氏に、
制作活動、芸術に対する想いを伺い
ました。

自然への想い

土や植物に触れることは、地球という星に触れるのと同じことだと思います。都会で生活していると、一日に一回も地球に触れることなく一日を終える人がほとんどではないでしょうか。僕はなるべく天然の鉱物を砕いて作られている絵具を選ぶように



平等院鳳凰堂 / 2003 / 120cm×204cm / 和紙、金属箔、墨

しています。また、最近では植物を燃やした煤を集めて膠で棒状にした、墨の良さを改めて感じ使っています。その墨を硯という石で磨り、動物の毛で作られている筆で、植物から作られた紙に描く。そして、自然の姿をその中に写し取る。そういう仕事をしているので、常に地球と関わっているという実感があります。

しかし、30年ほど前に都心にあったアトリエの窓からは、隣の家しか見えません。仕事場の窓からは空と緑だけが見えるという環境で仕事がしたくて、平成元年に都心を離れ、東京都青梅市の河沿いの地に越しました。アトリエから望めるのは、緑と河だけという理想の場所で、制作の合間に近くの河原で寝そべったり、犬を連れて散歩したりしています。都心に比べると不慣れた面はありますが、それには代えられない得難いものがあります。また、2010年に奈良県五條市にアトリエ「虫籠庵」を開設しました。自然に恵まれ、さらには歴史に裏打ちされた地で、この国の奥深いところを流れている普遍的な潮流を感じられ、青梅と奈良は、本当に表現し

たいのは自然や地球に対する自分自身の想いだっただけのこと、そして、自分はどこからきてどこへ行くのかなどを気づかせてくれました。

時を超えてつながる芸術

奈良の山奥には、これまでに訪れた東南アジア諸国や中国の山奥など、様々な場所で見たいものが詰まっているような気がします。今は、ここに眠っている歴史や伝統を少しずつ掘り起こして、水の形を通して再構築し、作品の中で表現しています。時々、昔の画家が同じような感覚で描いたのではないかと思う作品と出合うことがあります。そうした作品は、絵を通じてその画家と会話することができます。



す。音楽も同じでしょう。今地球上で生きて
いる人は、誰もモーツァルトに会ったことがあり
ません。でも、彼の音楽を聴くことで、その
人柄に触れ、作曲された時代の空気を感じる
ことができます。

好きな画家の作品を観るとドキドキしたり、
涙が出てきたりすることがありますよね。観
る人に様々な感情を起こすことができるのがこ
の仕事です。絵でも音楽でも映画でも、作品
を受け取ったその人自身が持っている受信機で
作者の想いやメッセージをキャッチし、実際は作
者に会わなくても、作品を通して会話したり、
心を通わせたりすることができます。それ故に、
作者が亡くなつて遺された作品を、戦火から
命がけで守る人たちがいるのです。絵には生命
力があることを信じずにはいられません。

文化財保護の重要性

明治維新の頃、日本は欧米列強に追いつ
くため、西洋文化を積極的に取り入れまし
た。歴史を振り返ると、多くの国で前王朝
のものはすべて壊し、まったく新しいもの
に作り替えてしまっています。けれど日本
は、以前からある独自の文化をすべて無く
してしまうことをしませんでした。世界最

古の倉庫であり博物館でもある正倉院には、
1300年以上前の美術工芸品や書物が残
されています。新しいものを取り入れても、
古いものも大事に持ち続けているのが日本
です。その古いものが傷んだり、壊れたり
した部分を修復する技術には目を見張るも
のがあります。例えば、欠けた器を漆の技
術でつなぎ、繕ったところを隠さ
ず見えるようにすることによって
新たな美しさが生まれるという発
想、“わびさび”という言葉だけに
集約できない美の世界が日本には
あります。

文化財の保護は、文部科学省の
管轄下にある文化庁が行っていま
す。文部科学省は科学技術や教育
まで管轄しているため文化財保護
に必要な予算はとて少なく、国
家全体の予算規模は日本のほうが
大きいにもかかわらず、文化に関
する予算は韓国の半分ほどしかな
いのが実情です。日本は経済にお
金をかけても文化にはほとんど使
わない、世界でも珍しい国なので
す。しかも、各種美術品を修復で
きるプロフェッショナルが減つて



きていて、修復費用も高くなっています。
こうしたことからは、貴重な美術品の修復を
リーズナブルにできるように、人材を育成
する仕組みを作りたいと考えていたところ、
僕が教えている横浜美術大学で修復のプロ
を目指す学生の育成に取り組むことになり、
文化・教育事業として保存・修復に取り組

む新しいシステムを始めました。横浜美術
大学は首都圏の大学としては初めて学部
修復コースを持つ美術大学になります。

好きなことを続ける

小さい頃から絵を描くのが好きで、中学
生のときから将来は画家になりた
いと思いはじめました。高校時代に
美術の先生によって日本画を知り、
浪人して大学に入って好きなこと
を続けてきました。人生にはいろ
いろな選択肢があります。高校受
験の時、学校では有名校に進学す
る道を指導されましたが、どん
なに頑張っても学年で一番の成績を
取ることができず、学力の世界で
は自分の居場所はないと思いまし
た。では、自分の居場所を確保で
きる仕事は何だろうかと考えたとき、
僕には絵がありました。自分より
絵の上手な人はたくさんいました
が、絵が好きという思いを持って
進んできたなら、幸いなことに今で
も画家を続けられています。

ら、世界で発表したいですね。それは、世
界的なメディアに取り上げられたり、作品
が高く評価されたりするためではありません
ん。作品を通じて僕の世界観を知ってもら
い、その世界観に共感できる人たちとな
がり、世界中にネットワークができれば面
白いだらうと思うからです。これからずつ

と、現代の作家ではあるけれど日本古来の
ものに根差し、奈良の山奥の宝石箱で見つ
けたものを作品の中で表現していきたい、
そう思っています。

いつか納得できる絵が完成した



杉山 大輔 Daisuke Sugiyama

Profile

「私の哲学」編集長 | ビジネスプロデューサー
株式会社インターリテラシー 代表取締役

1979年東京都生まれ、ニューヨーク育ち。慶應義塾大学総合政策学部卒業。慶應義塾大学大学院経営管理研究科修了(MBA取得)。1999年に教育コンサルティング会社を立ち上げ、2007年コミュニケーション問題の解決をはかる株式会社インターリテラシーを設立。3男1女、4人の子供の父親。

『脱米論』(財)公共政策調査会主催、読売新聞社後援「21世紀においてあるべきわが国のかたち」をいかに考えるか」優秀賞受賞。『守破離』日本貿易会主催「ジャパンブランドの可能性」第2回日本貿易会賞優秀賞受賞。著書に『行動する勇氣』(フォレスト出版)、『運を動かせ』(ディスカヴァー・トゥエンティワン)がある。

青梅の自宅アトリエにて 編集:楠田尚美 撮影:Sebastian Taguchi